

第5回（仮称）平和資料館開設準備懇話会について

1 概要

（仮称）平和資料館の開館に向けて、自主事業や運営体制等の検討を進めるため、学識経験者や他の公立の資料館関係者等の専門的な見地から意見を聴取する「（仮称）平和資料館開設準備懇話会」（以下「懇話会」という）を設置している。

本年1月に第5回の会議を開催しており、懇話会委員の意見を基に、今後の方向性を整理した。

2 開催期間 令和元年8月～令和4年1月（計5回）

3 懇話会の進め方（意見聴取事項）

開催日等	意見聴取事項
（令和元年度） 第1回：8月27日（火）	○（仮称）平和資料館基本計画・実施設計 ○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・プロローグ（導入展示） ○館の自主事業（展示以外）
第2回：1月30日（木）	○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・戦前の北九州 ・戦争と市民の暮らし ○館の管理・運営（ボランティアの導入）
（令和2年度） 第3回：8月26日（水）	○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・空襲の記憶 ・運命の昭和20年8月8日・9日 ・戦後の復興 ・エピローグ 等 ○館の管理・運営（戦時資料の収集）
（令和3年度） 第4回：7月 1日（木）	○事業計画（名称、料金、開館時間等）について
第5回：1月14日（金）	○委員意見の整理及び今後の方向性について

4 懇話会後の取り組み

懇話会委員の意見を参考に、また、議会からのご提案等を踏まえつつ、運営計画をまとめる。

《資料》

- ・ 第5回（仮称）平和資料館開設準備懇話会委員の主な意見について 別紙1
- ・ （仮称）平和資料館開設準備懇話会について（報告書） 別紙2
- ・ 平和のまちミュージアム開館に向けたスケジュールについて 別紙3

【参考：委員名簿】

氏名	所属等
後藤 みな子	一般社団法人 北九州文学協会理事長
◎ 近藤 倫明	北九州市立大学名誉教授
佐方 はるみ	九州女子大学人間科学部特任教授
篠崎 桂子	長崎原爆資料館館長
戸高 一成	呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）館長
凧 恵美	松永文庫 室長代理
○ 羽田野 隆士	北九州商工会議所 専務理事
吉水 請子	極東ファディ株式会社 取締役

◎座長 ○副座長

（敬称略・50音順）

第5回「(仮称)平和資料館開設準備懇話会」での委員の主な意見 (概要)

■ 報告：「平和のまちミュージアム」開館に向けた取り組みについて 「北九州市平和のまちミュージアム条例」の概要について

(加害・被害の展示について)

- ・ 戦争の「加害・被害」の展示については、日本の一つのまちで戦争を始める権限はないので、一つのまちの歴史の中では、実際は関係ないが、歴史の流れとして、日本とアメリカの国益の衝突で武力解決を選ばれてしまったという簡単な流れは示しておくべきだと思う。
- ・ 「加害・被害」という視点ではなく、来館者が、当時、北九州に起きたことを学び、平和が大切だと考える施設にして欲しい。

(条例概要について)

- ・ 名称の「平和のまちミュージアム」は、一番妥当でいい名前だと思う。
- ・ 入館料に関しては、安価に設定しているのが非常にいいと思う。小中学生については減免措置をとるということで、子どもたちにまず見てもらうことに力を入れていることは非常にいいと思う。
- ・ 休館日に関しては、長崎原爆資料館は年末の12月29日から31日を除いて、1月1日から開館しており、ほぼ年中無休の施設になるが、エリアで周遊してもらうことから、休館日を近隣施設と合わせることもいいと思う。

■ 議題：懇話会における委員意見の整理及び今後の方向性について

(360度シアターについて)

- ・ お化け屋敷のように怖い体験をさせることが目的ではないので、あそこは怖かった、もう行きたくないと思われても困る。大変だったということを展示することは大切だが、演出過剰な展示も考えものである。
- ・ 閉ざされた暗い部屋の中で、音の大きさ等で、パニックになる子どもいるかもしれない。この点を踏まえて展示制作を進めてほしい。また、パニックになった子どもへの対応等もミュージアムとして考えておく必要がある。

(展示解説について)

- ・ ミュージアムが何を大事にするかということ、純粹に客観的な事実からはずれないということ。どのような表現であっても、説明を求められた時に、これはこういう事実に基づいているということが言えればよい。この施設はこういう考え方を持っていて、その根拠が事実から離れていなければ良いと思う。
- ・ 原爆資料館の展示には、戦前の歴史は入れているが、いろいろな意見や説があり、検証されているものもあればそうでないものもある。展示解説は教科書に合わせているが、教科書の内容も変わることもあるので、慎重にやっていかなければならない。

(資料収集について)

- ・ その方にとっては大事な資料であっても、その物が何を伝えるのかというところが大事になってくる。使っていた人が亡くなった後、家族がどうなったなど、エピソードで伝わるものがある。周辺情報をしっかり聞き取ることが必要である。
- ・ 自分にとっては宝物みたいに大事だとみんな思っている。資料収集のコンセプトをきちんとしておかないと、自分にとっては命みただけど、展示されず、しまい込んだままでどうなったのだろうという場合が多いので、断る勇気も必要である。
- ・ ミュージアムの命は資料なので、厳しく見て、受け入れたものはきちんと管理して、データベース化して有効利用できるよう、また、研究者に提供、一般の人も見られるようにしないといけない。厳しい考え方で対応をすることも必要だと思う。

(その他)

- ・ 長崎原爆資料館では、原体験が違う現代を担う若い世代にどうやって戦争の記憶を伝えていくのかということが課題である。このミュージアムは今から立ち上げるので、私たちが課題としているところを、一緒になって考えていければと思っている。
- ・ ミュージアムが存在することを市の財産として大切にしていくことを願っている。「なぜ、ここにこの施設があるのか」、その「なぜ」と言って眺める方もたくさんいると思う。その「なぜ」にしっかり答えていくことで、まちの中に溶け込んだミュージアムになっていくように、そうやっていかなければいけないと思う。
- ・ 立派なミュージアムができるので、行政と一緒に協力して一人でも多くの人に見ていただけるように、運営面で協力していきたい。
- ・ 新しい平和教育の姿を模索する状況の中で、意義ある施設になると思う。知らない戦争を知らない世代に伝えていくという平和教育のターニングポイントという時期にオープンする施設なので、新しい平和教育のあり方を示していくリーダーになれるような運営をしていただきたいと思っている。

(仮称) 平和資料館開設準備懇話会について
(案)

令和4年2月
北九州市

目次

1	委員の意見及び今後の方向性について	・・・	1
	(1) 展示コンセプトに基づく展示内容の整理について	・・・	1
	○「プロローグ展示」コーナー		
	○「戦前の北九州」コーナー		
	○「戦時下の市民の暮らし」コーナー		
	○「空襲の記憶」コーナー		
	○「運命の昭和20年8月8日・9日」コーナー		
	○「戦後の復興」コーナー		
	○「エピローグ展示」コーナー		
	○その他		
	(2) 自主事業（展示以外）について	・・・	9
	○子どもから大人まで学びを深めるための取組み		
	○近隣の施設や学校等との連携による来館者の確保のための取組み		
	○活動や魅力等を発信するための取組み		
	(3) 管理・運営について	・・・	10
	○ボランティアの活用		
	○学芸員の配置		
	○資料の収集		
	○戦争体験の収集		
2	資料編		
	(1) (仮称) 平和資料館開設準備懇話会の目的・進め方	・・・	13
	(2) (仮称) 平和資料館開設準備懇話会構成員名簿	・・・	14
	(3) 議事要旨	・・・	15
	(4) 要綱	・・・	29

1 委員の意見及び今後の方向性について

(1) 展示コンセプトに基づく展示内容の整理について

○「プロローグ展示」コーナー



(委員の主な意見)

- ・多世代の来館者が、なぜここに資料館があるのか、その場で理解でき、来館者を、資料館に導入できるような仕掛けは必要である。
- ・アメリカ軍が“なぜここに原子爆弾を落とそう”と思ったのか。誰が見ても分かるようにするためには、もう少し分かりやすい何かが必要である。
- ・長崎原爆資料館では、原子爆弾が投下された11時2分の時計を展示して「長崎を最後の被爆地に」というメッセージを出している。小倉の位置づけの表現は難しいが、訴えたいことを最初に示すのもひとつのアイデアである。

今後の方向性

- ・原子爆弾の投下目標地であった事実を伝え、“なぜ、ここに、この施設があるか”を実感できる展示
- ・施設の世界観に没入できる展示

○「戦前の北九州」コーナー

兵器の製造風景等の映像と工場模型への投影を行うプロジェクションマッピング。小倉陸軍造兵廠の全貌をリアルな立体感で再現する。

戦前の北九州
日本を代表する工業都市として、北九州地域が発達する中で、陸軍の弾薬や軍需施設が置かれたことを紹介する。

〈小倉陸軍造兵廠の誕生〉
小倉陸軍造兵廠が設置された経緯・背景や、設置されたことによる影響、従軍員の作業の様子を紹介する。





小倉陸軍造兵廠のプロジェクションマッピング

映像・映像
Cinema
Video
Photo

小倉陸軍造兵廠の成り立ち、工場の様子を工場模型に映像を投影（プロジェクションマッピング手法）することにより解説する。

イメージ



映像に連動して小倉陸軍造兵廠の建物模型に映像を表示する

■プロジェクションマッピングシステム概要
小倉陸軍造兵廠の工場模型（白模型）に、上部からプロジェクターによる映像投影を行う。

映像は2つのコンテンツから選択

①《小倉陸軍造兵廠の成り立ち》
各工場にスポットライトを当てながら、工場に関連する古写真や背景のスクリーンに投影、工場の成り立ちや製造された兵器について解説する。

②《小倉陸軍造兵廠を見る》
手元のタブレットに表示された工場の平面図にある工場を実際者が選択すると、それぞれの工場に関連した情報が紹介される。



●例：
特設展示では小倉陸軍造兵廠の歴史を把握できるように、現在の栗山公園の地形を模型に投影。

（委員の主な意見）

- ・ 風船爆弾の仕組みや製造方法に関する展示では、当時、女子挺身隊の方が風船爆弾の製造に係っていた。その記録等が大事だ。
- ・ 小倉陸軍造兵廠を、子どもたちに教える時に、当時、全国に造兵廠はどのぐらいの数があるか、そのうちのひとつが小倉にあるということも紹介してはどうか。

今後の方向性

- ・ 女学生等の体験談を活用した展示
- ・ 小倉陸軍造兵廠を紹介するため、当時の日本の兵器工場の状況等を説明する展示

○「戦時下の市民の暮らし」コーナー

戦時下の暮らし(市民の暮らし)

戦時下の暮らしを伝える日用品等の実物展示や実物資料を効果的に見せる紗幕展示。戦争によって大きく変わった市民の暮らしを感じる。

戦争と市民の暮らし
戦時下の戦後を守った市民の暮らしや子どもたちの遊び、学校生活を紹介する。

(市民の暮らし)
出征する兵士たちと戦時下の戦制と節約の中で生まれた市民の暮らしを知る。





出征や戦時下の暮らしに関する資料

実物資料
現在、臨時資料展示コーナーなどに保管されている市民から寄贈された様々な実物資料を展示。



千人針は、出征する兵士の帰郷を祈願したお守りとして作られた。戦後の人々が思いを込めてひと針ひと針縫いつけた。

【映像装置】国防婦人会

資料
出征する兵士と国防婦人会の活動について、衣類の実物展示と映像を連動させて解説する。資料が透けて見える紗幕に投影する演出手法を用いる。



イメージ

戦争と市民の暮らし(市民の暮らし)

生活の基礎となる衣食住を感じることができる暮らしの再現展示。日々の暮らしが戦争ととりあわせにあったことを実感する。

戦争と市民の暮らし
戦時下の戦後を守った市民の暮らしや子どもたちの遊び、学校生活を紹介する。

(戦争と子ども)
戦争の激化と物資不足に伴い、大きく変わった子どもたちの生活等を体験する。





スクロール / 画像情報検索
らびとらびのり、年暮

戦時中の暮らしの再現展示

再現展示
戦時中一般家庭が生活した室内の情景再現から、暮らしの道具、食事、娯楽への差など、当時の人々の暮らしについて理解を深める。

情報再現の例

		
まつかげ	ラジオ	炬燵



分銅ばかり、カマ、金盥、火のし、かきつ、金盥

戦時中の衣履

資料
戦時中の衣類を歴史的に着る体験を通して、当時の雰囲気を感じ取るとともに、戦時中の衣類に関する理解を深める。

体験の流れ(例)

- ①体験者が二階の廊下に入る全身を撮影
- ②衣装と衣装を再現しているもの
- ③衣装を着ると同時に



(委員の主な意見)

- ・暮らしの再現展示では、日用品を単に置いているのではなく、それが、どのようなものなのかを、想像させるような工夫が必要である。

- ・暮らしと密接している資料は、来館者が興味を持ち、その頃の暮らしぶりを想像してもらえる資料として貴重なものだ。

今後の方向性

- ・戦時中の暮らしを理解するため、日用品等の実物資料の使い方等が分かる展示

○「空襲の記憶」コーナー

小倉陸軍造兵廠で製造された風船爆弾の模型を展示。風船爆弾の仕組みや製造方法、その背景にある市民の過酷な労働や体験を感じる。

空襲の記憶
空襲目標となった北九州市の各町域や市民の過酷な戦争体験、北九州における防空体制等を紹介する。

【北九州と空襲】
空襲の空襲目標となった北九州の空襲被害の状況等を知る。

風船爆弾の真実
定兵庫で戦争末期の初期に生産された風船爆弾の模型を実物の1/5スケール(直径2m・全長5.5m)で再現。

風船爆弾とは何か
風船爆弾の各種装置と米国本土まで到達する仕組みについて、画像を通じて説明する。

【実物資料】風船爆弾の部品／【ハンズオン】風船爆弾の仕組み
風船爆弾の気球につかわれた船殻と雷等のものに実際にふれてみる事ができる展示。

●ハンズオン
資料に触れる体験
風船爆弾の仕組みをさわってみよう！

気球上部(4重)
気球下部(3重)
ガス排気弁
座席
気球破砕用火薬
懸吊綱 19本
導火線
2kg焼夷弾 2個
15kg針入攻撃用爆弾

(委員の主な意見)

- ・当時の小学校や中学校の教育内容、新聞の報道内容が子どもたちに与えた影響など、戦争に至るまでのバックグラウンドをもう少し入れる必要があるのではないか。
- ・原爆資料館では感染予防対策として、触れることができる展示にはカバーをしたり、タッチパネルは触れさせないようにするという対策を講じている。

今後の方向性

- ・体験者の声に加えて、時代の背景等を伝える展示
- ・感染症対策を踏まえた展示

○「運命の昭和20年8月8日・9日」コーナー

映像や音響技術を活用した360度シアター。
昭和20年8月8日の八幡の空襲、翌9日の原子爆弾を搭載したB29が小倉上空を飛来した後、長崎に向かった2日間の出来事を追体験する。

運命の昭和20年8月8日・9日
 8月8日の八幡の空襲をシアターにおける体験時間を通して、八幡のまちが被爆地になり、多くの人が犠牲にあった事実を知る。



実物資料/浴解したサクラビール瓶



「運命の昭和20年8月8日・9日」

8月8日の八幡大空襲から9日のB29小倉飛来までの経緯を「後世に語り継ぐや北九州市民の戦争体験」などの証言を基にしたストーリー。

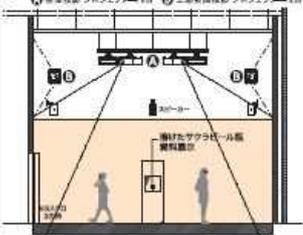
当時の証言と出来事をCGで想定再現し、追体験できるものとする。

360度全周シアターで、臨場感にあふれる空襲の再現映像を床振動などの効果を用いながら投影する。

●運命の昭和20年8月8日・9日 ストーリー

- 1. プロローグ** 昭和20年8月の北九州…小倉や八幡で生活する人々にとって、戦時下ながら普段通りの生活があった。
- 2. 8月7日～8日** 八幡の入りかきで空襲された際、高かデニアン島では救急車を派遣したB29の大群が日本へ向け艦隊の準備をしていた。
- 3. 8月8日の朝** 大朝卒業日の8日の朝、学校に向かう子どもたちや勤労奉仕や小倉陸軍海兵隊へ向かう学生など、いつもの朝があった。そして朝10時、B29の大群が八幡の空に現れた。
- 4. 空襲** 容赦なく降り注ぐ焼夷弾の雨、激突は燃えさかり人々は逃げまどいだ。防空壕に逃げた人々も決して安全ではなかった。
- 5. 空襲後の静寂** 1時間後、B29が去り残されたのは、煙にがすみ燃焼面と化した八幡の町だった。
- 6. 8月9日 朝** 前日の空襲の煙がたなびく、北九州の空にはB29が現れた。いぶかしく見上げる人々。やがてB29は小倉の空から、次の目標である長崎へ原爆投下のために向かっていった。

●シアター全体イメージ



(委員の主な意見)

- ・展示ストーリーとして、八幡大空襲があって、翌日にB29が来て、旋回して長崎に行ったことしか紹介していないので、小倉に資料館を建設する必要があったということが、印象として弱いように感じた。
- ・戦争を体験した人は多くないため、事実をきちんと伝えることは非常に重要である。戦争体験者に検証してもらいながら展示の制作をしてほしい。
- ・閉ざされた暗い部屋の中で、音の大きさ等で、パニックになる子どももいるかもしれない。この点を踏まえて展示制作を進めてほしい。また、パニックになった子どもへの対応等も考えておく必要がある。
- ・怖さを見せることが重要ではない。大変だったことを伝える必要があるが、演出過多になってはいけない。歴史の事実を伝えることを主眼に置いてほしい。

今後の方向性

- ・原子爆弾の投下目標地であった事実を伝え、“なぜ、ここに、この施設があるか”を実感できる展示
- ・体験者による時代考証等に関する助言を活かした展示制作
- ・来館者への影響等を考慮した展示制作

○「戦後の復興」コーナー



（委員の主な意見）

- ・戦争の被害だけに注目するのではなく、戦後は四大工業地帯と言われるほど、復興したところに脚光を当てるのが、子どもたちにとっての未来志向になる。
- ・長崎には、アジア系の方が多く来るが、長崎は壊滅的な被害を受けたのに、どのようにして、これほど復興したのかと聞かれる。北九州も、大変な努力をされて、復興されたと思うので、紹介できればと思う。

今後の方向性

- ・戦後復興に取り組んだ企業や市民の努力に焦点を当てる展示

○「エピローグ展示」コーナー



(委員の主な意見)

- ・資料館の建設の原点である「なぜ小倉に？」というのが、「エピローグ」にもっと表れていいのではないかな。
- ・「エピローグ」では、展示を見た後に、一人ひとりのものとする沈黙考というような、ゆとりみたいなものも必要ではないかな。

今後の方向性

- ・展示鑑賞後に、施設の意義や展示感想等の振り返りができる雰囲気づくり

○その他

(1) 北九州市非核平和都市宣言の展示

- ・非核平和都市宣言や北九州市が平和に対して取り組んできたことは、動線としては最初ではなく、最後の方で展示する方がいいのではないか。
- ・入口の付近に展示することは、ロビーの中などで入館者の目に触れる機会は多くなるが、入館者の動線を考えると思いのほか足を止めにくいのではないか。
- ・動線では目に留まらないなら、パンフレットの形で渡せるほうが親切ではないか。
- ・宣言の内容は、展示の中から、それぞれに感じ取ることが一番、重要ではないか。どこに展示するのかということは重要ではなく、展示室を最後まで歩いて「こういうことなんだ」と思うことが一番大切なことではないか。

今後の方向性

- ・非核平和都市宣言の内容を実感できる展示や館内でのPRの工夫

(2) 展示の考え方

- ・教科書も参考にするのは良いが、館として「事実を客観的に伝える」というコンセプトを大事にすることが必要である。
- ・原爆資料館の展示には、戦前の歴史は入れているが、いろいろな意見や説があり、検証されているものもあればそうでないものもある。展示解説は教科書に合わせているが、教科書の内容も変わることもあるので、慎重にやっていかなければならない。
- ・戦争は地域が起こすものではなく、国と国との国益のぶつかり合いである。北九州の歴史と関係はないが、アメリカと日本が戦争をした流れは簡単に示しておくことが必要である。

今後の方向性

- ・小学校の教科書等を参考に、事実に基づく、子どもたちにも分かりやすい展示解説
- ・小学校の教科書等を参考に、年表等を活用した時代背景の説明

(2) 自主事業（展示以外）について

○子どもから大人まで学びを深めるための取組み（委員の主な意見）

- ・戦争の映画を多目的室で上映する、戦争文学や地元に関するものを読み聞かせする、食のイベントをやるなど、いろいろなことをこの場所でやることに意義がある。
- ・長崎県の小中学校は無料で、原爆資料館を年に1回は見学するように、教育委員会とも連携している。地元の皆さんに来ていただくことが大事と考えている。
- ・「SDGs」を関連付けて連携させるような取組みで、毎年、催し物があれば、独自性が活かせるのではないかな。
- ・特別展示で、戦争の時代の背景を持った漫画雑誌や広告のチラシなどを取り上げると、いろいろな方に見ていただく機会をつくり、そこから本来伝えたいものを、見たいものにつながるのではないかな。
- ・いつでも気軽に来てもらいたい仕組みが必要ではないかな。市民が身近に感じることができ、シビックプライドに繋がるような運営を期待している。

今後の方向性

- ・展示テーマを踏まえ、来館者の幅広い興味に対応するイベント等の実施
- ・「SDGs」の取組み等、子どもたちの学習に関連する題材の提供
- ・市内の小学生等が必ず訪問する仕組みづくり

○近隣の施設や学校等との連携による来館者の確保のための取組み

○活動や魅力等を発信するための取組み（委員の主な意見）

- ・資料館が建つこの場所は、文化施設が集約されており、歩いて散策できる。近隣施設が連携し合うような形が、理想的にできる場所である。
- ・この地に資料館がある意味をどういった形で提示していくか。小学校児童や中高生だけでなく、幅広い世代に門戸を開くという形でのアイデアが必要である。
- ・多くの人に見てもらうためには、類似の施設と連携して、どんな企画展をやっているかなど情報交換を行い、企画を考える必要がある。
- ・エリアで回遊することを考えた場合、休館日は近隣施設と合わせる等、柔軟な対応が必要であり、周辺でイベントがある場合は、休館日でも開館することが必要ではないかな。

- ・施設一帯をアートな雰囲気や静かでほっとする空気感を醸すエリアに創りあげる。ライトアップして、例えば、カップルで訪れたくなる空間づくりで、雰囲気に惹かれて、迷い込み、平和について知るといった流れもある。また、開館時間を柔軟にし、夜間に、平和を振り返るイベント等も開催してはどうか。

今後の方向性

- ・近隣施設と連携した歴史・文化・芸術等に関するプログラムの構築
- ・周辺環境を活かした誰もが訪れたくなるイメージ構築
- ・施設の意義等を幅広い世代にアプローチする取り組み

(3) 管理・運営について

○ボランティアの活用・学芸員の配置（委員の主な意見）

- ・展示解説のボランティアの導入は望ましいが、運用は難しい面もある。研修を行っても、どうしても、その人の主観が入る。
- ・平和学習では、子どもたちに事実を伝えることが必要なので、教育的立場での説明は、専門性のある学芸員や職員が行うべきではないか。
- ・ボランティアの活用は若い人の育成ということなら、子どもたちに影響がない程度の範囲であればいいのではないか。
- ・ボランティアには、いろいろな思いで集まっているので、「できること」「できないこと」に分けて、影響のない形に整えてからお手伝いしてもらうのが良い。
- ・学芸員の役割というのはかなり重要。仮に採用するとしたら、長い年月の間、1人か2人で担当することになるので、複数配置が望ましい。

今後の方向性

- ・ボランティア活動の整理と若い世代の参加促進
- ・ボランティア活動が与える来館者への影響等を踏まえた運用
- ・学芸員を中心とした資料収集・検証体制の整備

○資料の収集（委員の主な意見）

- ・資料の寄贈は全て受け取ることはできない。仮に受け取ったとしても、コンセプトに基づかないものは展示できないことを伝える必要がある。
- ・寄贈を受けて展示するまでの一定のルールは必要。原爆資料館では、毎年夏、その年の6月までに寄贈された資料を収蔵品展として企画・展示している。
- ・個人にとって思い出のある物でも、それに将来的にどのような価値が生まれるかを考えて対応する必要がある。
- ・古いものをどう残すか、減ることはない。重要なのは劣化を防ぐことである。アーカイブ化、映像に撮る等、3次元データとして保存する。新しい物づくりの、この市における保存の仕方、データの残し方も必要になる。
- ・市民の戦争体験談を、映像アーカイブで語っていただくような、音声と映像で後々まで見ることができたら良い。

今後の方向性

- ・寄贈資料の取扱いのルールづくりや様々な手法を活用した保存や継承方法の構築

○戦争体験の収集（委員の主な意見）

- ・戦争体験の収集は、今後、戦後復興時の体験を集めることがメインになるため、5年後、10年後に集めようとしても遅い。
- ・資料を収集する際に、その資料にまつわるエピソードや寄贈者の戦争体験、家族である場合は聞いていた話などを詳しく聞き取っておくことが重要だ。
- ・女子挺身隊や学徒動員、八幡の大空襲を経験した人も90歳を過ぎている。その人から話を聞いて残すことは非常に難しいので、原爆資料館では、体験を聞いて、引き継ぐことを行っている。

今後の方向性

- ・戦後復興期の体験談収集の着手
- ・資料の寄贈等、様々な機会を通じた体験談の聞き取りの実施
- ・様々な手法を活用した体験談の保存や継承方法の構築

2 資料編

(1) (仮称) 平和資料館開設準備懇話会の目的・進め方

1 目的

市民に戦争の悲惨さ等を後世に伝え、平和の大切さ、命の尊さを考えるきっかけとする(仮称)平和資料館(以下「資料館」という)の開館に向けて、自主事業や管理・運営体制等について、具体的な検討が必要であるため、専門的な見地からの意見を聴取する「(仮称)平和資料館開設準備懇話会」(以下「懇話会」という)を開催した。

2 開催期間

令和元年8月～令和4年1月(計5回)

3 懇話会の進め方(意見聴取事項)

開催日等	意見聴取事項
(令和元年度) 第1回：8月27日(火)	○(仮称)平和資料館基本計画・実施設計 ○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・プロローグ(導入展示) ○館の自主事業(展示以外)
第2回：1月30日(木)	○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・戦前の北九州 ・戦争と市民の暮らし ○館の管理・運営(ボランティアの導入)
(令和2年度) 第3回：8月26日(水)	○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・空襲の記憶 ・運命の昭和20年8月8日・9日 ・戦後の復興 ・エピローグ 等 ○館の管理・運営(戦時資料の収集)
(令和3年度) 第4回：7月 1日(木)	○事業計画(名称、料金、開館時間等)について
第5回：1月14日(金)	○委員意見の整理及び今後の方向性について

4 懇話会後の取り組み

懇話会の構成員(委員)の意見を参考に、自主事業や管理・運営体制等をまとめ、事業計画を作成する。

(2) (仮称) 平和資料館開設準備懇話会構成員名簿

氏名	所属等
後藤 みな子	一般社団法人 北九州文学協会理事長
◎ 近藤 倫明	北九州市立大学名誉教授
佐方 はるみ	九州女子大学人間科学部特任教授
篠崎 桂子	長崎原爆資料館館長 (第2回懇話会まで「大久保 一哉」氏)
戸高 一成	呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)館長
凧 恵美	松永文庫 室長代理
○ 羽田野 隆士	北九州商工会議所 専務理事
吉水 請子	極東ファディ株式会社 取締役

◎座長 ○副座長

(敬称略・50音順)

(3) 議事要旨 (第1回～第5回)

第1回 懇話会における委員の主な意見等

■議題：コンセプト等に基づく展示内容の整理について

(プロローグ展示)

- ・このように、多世代の来館者が、なぜここに平和資料館があるのか、その場で、理解でき、来館者を資料館に導入できるような仕掛けは必要である。
- ・小学生は、原爆投下命令書や小倉陸軍造兵廠といわれても、それが何か分からない。米軍がなぜここに原子爆弾を落とそうと思ったのか。誰が見ても分かるようにするためには、もう少し分かりやすい何かが必要だと思う。
- ・展示している米軍の原爆投下命令書は、資料の下に全体の説明があるよりは、全く同じフォーマットで翻訳されたものが上下に並んでいて、その下に説明があると、より理解が深まるといった資料的な親切さがあると良い。
- ・全体のストーリーの展開の中で、「運命の8月8日、9日」が物語のピークに当たるとすると、原爆投下命令書のところで、長崎と広島で起こったことの説明は、ある程度伝わるように組み込んでおかないと、8月8日、9日のできごとの意味を、正しく分かりやすく伝えることに問題が起きてくるのではないかと思う。
- ・プロローグは照明を暗くすることで、違う空間に入ったということが分かるようにすると、展示の時代に入り込める。

■議題：自主事業（展示以外）について

(論点1：子どもから大人まで学びを深めるための取組み)

- ・北九州市の資料館と「SDGs」を関連付けて連携させるような取組みで、毎年、催し物があれば、独自性が生かせるのではないか。7月の平和学習の月間だけでも、北九州市独自の取組みをしたら良いと思う。
- ・戦争の映画を多目的室で上映する、あるいは、戦争文学や地元に関するものを読み聞かせする、食のイベントをやるなど、いろいろなことをこの場所でやることに意義がある。
- ・いろいろな文化、そういうものをこの場所でやるという姿勢。平和の資料館だから、それに関連したものを共有する自主的な事業もやることが必要。その時に重要なのは、独自性を保ちながら、来館者がそれぞれの立場で学ぶということだと思う。

(論点2：近隣の施設や学校等との連携による来客者の確保のための取組み)

- ・集客を狙うのであれば、特別展示はとても大事になる。子どもにアプローチしやすいもの、例えば、戦争の時代の背景を持った漫画雑誌や広告のチラシなどを取り上げると、もっと間口を広げていろいろな方に見ていただく機会をつくり、そこから本来伝えたいものを見ていただけることにつながるのではないか。
- ・資料館が建つこの場所は、文化施設が集約されており、歩いて散策できる。近隣施設が連携し合うような形が、理想的にできる場所である。
- ・多くの人は1回しか、来るチャンスはない。そのチャンスを逃さず、興味を掻き立てるものを与える必要がある。

(論点3：活動や魅力等を発信するための取組み)

- ・この地に資料館がある意味をどういった形で提示していくか。教育に関連した小学校児童や中高校生だけでなく、幅広い世代に門戸を開くという形でのアイデアが必要である。
- ・多くの人に見てもらうためには、類似の施設と連携して、どんな企画展をやっているかなど情報交換を行い、企画を考える必要がある。

■その他の意見

(展示の考え方)

- ・戦後の北九州の復興・繁栄は、大企業や数多くの中小企業、特に、ものづくり企業の血のにじむような努力の結果、もたらされたことを説明する必要がある。
- ・戦前の多くの若者が軍人を目指したのは、志願することが「平和日本」に繋がると信じたからという一面もある。当時の若者の発想にもスポットを当ててもらいたい。

(平和資料館の必要性等)

- ・これからの戦争の伝え方というのは、戦争を知らない人間が、自分も知らない戦争を、さらに知らない世代に伝えなければいけない。伝えなければならない戦争の歴史をどうやって伝えていくか。本当に難しい時代に入っていると思う。
- ・この施設を通して、若い人たち、子どもたちが、自分の町で起こったことを実際に自分の言葉で語るができるようになるというのは、本当に素晴らしいことではないかと思っている。

第2回 懇話会における委員の主な意見等

■報告：第1回懇話会・市議会等からの意見について

(非核平和都市宣言の展示について)

- ・資料館では、戦時下の暮らしなど幅広いテーマにした展示を通して、来館者が当時の人々の苦労などを学び、戦争を繰り返さないように考えることが大事である。宣言は大事だと思うが、大きく取り扱えば展示テーマが狭くなる。
- ・展示の議論の途中であり、委員がひと通り展示内容を把握した上で、どのように展示するかを検討した方がよいのではないかと。資料館は宣言のための施設ではないので、展示場所などは慎重に検討すべき。

(資料館の自主事業（集客等）のまとめについて)

- ・長崎県の小中学校は無料で、原爆資料館を年に1回は見学するように、教育委員会とも連携している。地元の皆さんに来ていただくことが大事と考えている。
- ・「SDGs」と関連付ける展示があれば、英語で伝えることで、現代的な意味が、広がるのではないかと。インバウンドの対象を英語圏に持っていく発想もあるのでは。
- ・「学ぶ」という言葉を多用されている。子どもたちは、「学ばなくてはいけない」かもしれないが、コンセプトは「伝える」なので、大人には、「知る」とか「出会う」に置き換えれば、事業の内容等が変わってくるのではないかと。
- ・資料館一帯をアートな雰囲気や静かでほっとする空気感を醸すエリアに創りあげる。8月になるとライトアップして、カップルで訪れたい空間づくりで、雰囲気に惹かれて、資料館に迷い込み、平和について知るといった流れもある。
- ・子どもたちの社会勉強や修学旅行に役立てる静かさと、まちの賑わいの構築とで考えると、資料館は来た人たちに静かに観てもらいたい所ではないかと。

(展示の考え方について)

- ・展示を見てもらうための工夫が必要。子どもには学んでもらう、大人には関心を持ってもらう、若い人たちには自分たちの問題ととらえてもらえるように、まずは多くの人に発信できればいいのでは。
- ・若い人には被爆者の話は伝わりにくい。気持ちは伝わっても、戦時中の食事の状況などが理解できないため、時代背景が分かる漫画などを使って、訴えていけばいい。
- ・長崎には、アジア系の方が多く来るが、長崎は壊滅的な被害を受けたのに、どのようにして、これほど復興したのかと聞かれる。北九州も空襲で被害に遭い、大変な努力をされて、復興されたと思うので、紹介できればと思う。

- ・戦争被害だけに注目するのではなく、北九州は、戦後四大工業地帯と言われるほど復興したところに光を当てることが、子どもたちにとっての未来志向になる。
- ・資料館は歴史的な事実を留め、何が良いのか悪いのかを考えるきっかけになる場所となる。重要なことは、資料館がある意義を体現できる形をつくることである。
- ・原爆資料館の展示には、戦前の歴史は入れているが、いろいろな意見や説があり、検証されているものもあればそうでないものもある。教科書に合わせているが、教科書の内容も変わることもあるので、慎重にやっていかなければならない。
- ・資料館では、北九州の当時の事実を理解でき、それが、現在にどう繋がるかを考えることになる。資料館には、10年後、10年間のものが蓄えられる。その観点から考えると、実際にどのように運用するかが大きな課題になる。

■議題：コンセプト等に基づく展示内容の整理について

(プロローグ)

- ・「原子爆弾が広島と長崎に落ちて、小倉には落ちなかった」ことをはっきり説明する必要がある。ひと目見て伝わるキャッチコピーがあれば、ターゲットも広がる。
- ・入ったところで何を訴えたいのかというのは大事である。長崎では、原爆投下から戦争などで核兵器が使われていない事実をふまえ、原爆が投下された11時2分の時計を展示して「長崎を最後の被爆地に」というメッセージを出している。小倉の位置づけの表現は難しいが、訴えたいことを最初に示すのもひとつのアイデアである。
- ・「戦後何十年」という言い方をするが、実際には現実で起こっており、危機はすぐ隣にあるという意識を持たせるメッセージは、重要な伝え方ではないか。過去の出来事でも時間軸で離れていないことも含めた形で表現するとより伝わりやすい。
- ・資料館のコンセプトの中の重要なところは「長崎に落ちたけれども、その前に小倉が候補地になっていた」ということであり、小倉に資料館をつくる意義がある。
- ・資料館で「小倉はそういう場所だったのか」ということに気づけば、「学び」は始まる。だからどうするということはそれぞれ受け手が、そこで考えていく。歴史の事実のシンボルという形のもがここにあるという存在自体をやっていくことが必要。
- ・展示を通して、「小倉にもこういうことがあった」「兵舎もあった」「空襲があった」「こんな暮らしをしている中で、長崎に飛行機が飛んで行って資料館の史実が起こった」と、点と点が繋がっていく。思考が繋がった状態で、長崎の平和講習に参加するのと、何も知らないで行くのとは、学びの深さが全く違う。

(戦前の北九州・戦争と市民の暮らし)

- ・小倉陸軍造兵廠というものを、子どもたちに教える時に、当時、全国に造兵廠はどのぐらいの数があるか、そのうちの一つが小倉にあるということも紹介してはどうか。
- ・プロジェクションマッピング等とは別に、唯一現物の本物を見せるというのはここの「戦争と市民の暮らし」のゾーンであり、現物の説明をし過ぎて、伝える、知ってもらうというよりも、静かにそれを見て考えてもらうようなスペース。このように、資料館の中にもメリハリのつくゾーンというのがあってもいい。
- ・長崎では、被爆資料を見て感じてもらうように、キャプションなどを少なくして、必要であればスマートフォンで補足をしている。
- ・実物資料の中には、見て分かるものと、分からないものとが混在している。日用品を単に置いているのではなく、どのようなものであるかを想像させる工夫が必要。

■議題：「管理・運営について」

- ・展示解説のボランティアの導入は望ましいが、運用は難しい面もある。研修を行っても、どうしても、その人の主観が入る。慎重に検討すべき。
- ・施設の管理については、施設によって考え方も違うので、どう活用するかは、これから全体像の中でボランティアの運用規定を示さないといけない。
- ・平和学習では、子どもたちに事実を伝えることが必要なので、教育的立場での説明は、専門性のある学芸員や職員が行うべき。
- ・長崎市でもイベントの手伝いとか、他都市から来られた人たちの案内を行っているが、大人とか被爆者のボランティアの場合は、研修しても、案内している時に自分の考えを言われることでトラブルが起きることがある。
- ・ボランティアの活用は若い人の育成ということなら、子どもたちに影響がない程度の範囲であればいいのでは。
- ・ボランティアには、いろいろな思いで集まっているので、管理する側が、「できること」「できないこと」に分けて、影響のない形に整えてからお手伝いしてもらうのがいい。
- ・ボランティアもいろいろな形があり、実際にどういう風にやるのかといえば、「難しい」という話しもあり、すぐに答えが出るような課題ではない。

第3回 懇話会における委員の主な意見等

■議題 コンセプトに基づく展示内容の整理について

(空襲の記憶)

- ・当時の小学校とか中学校の教育内容や新聞の報道内容が子どもたちに与えた影響など、戦争に至るまでのバックグラウンドをもう少し入れる必要があるのではないか。
- ・風船爆弾の仕組みや製造方法に関する展示では、当時、女子挺身隊の方が風船爆弾の製造に係っていた。その記録等が大事だ。
- ・原爆資料館では感染予防対策として、触れることができる展示にはカバーをしたり、タッチパネルは触れさせないようにしたりという対策を講じている。また、タッチパネルの画面も触れさせない時間はスライドショーによる展示ができるようにしておくなど、アフターコロナの資料館としての準備が必要ではないか。
- ・北九州市は物づくりの町なので、触らずに画面を変えるタッチパネルの開発も可能だと思う。工夫をしながら対応していただければと思う。

(運命の昭和20年8月8日・9日)

- ・シアター展示がすごく印象には残るが、ここでは、8月8日に八幡大空襲があって、9日にB29が来て、旋回して長崎に行ったぐらいしか紹介していないので、小倉に資料館を建設する必要があったということが、印象として弱いように感じた。
- ・映像や技術を駆使していることはよく分かったが、展示は、もう1回ゆっくり来てみようと思うようなものでないといけない。
- ・戦争を体験した人は多くないため、事実をきちんと伝えることは非常に重要である。戦争体験者に検証してもらいながら展示制作をしていただきたい。

(戦後の復興)

- ・戦後復興を映像で見せるということは非常に大事だと思うが、実物資料を見せることも大事なので、戦後に企業がつくってきた製品などを展示するのも良い。
- ・戦争映画の展示資料で、来館者がいちばん熱心に見るのが戦時中の実物資料である。映画チラシには、焼夷弾の炎をバケツリレーで消す「手順表」や配給カレンダーが印刷されている。暮らしと密接している資料は、来館者が興味を持ち、その頃の暮らしぶりを想像してもらえる資料として貴重なものだ。
- ・「運命の日8月8日・9日」の展示は、何も知らずに来た人たちにとっては、重たい映像を見ることになるため、「戦後の復興」の展示がより大事になる。

(エピローグ)

- ・戦争の悲惨さとか怖さとか、戦争はしてはいけないとか、戦後の復興は資料館を見て、体験していけば分かるが、資料館の建設の原点である「なぜ小倉に？」というのが、エピローグにもっと表れていいのではないか。
- ・「SDGs」について展示するなら、戦後復興の原点であった物づくりが公害で停滞し、復活するという形での「SDGs」ということが分からないとシビックプライドに結び付きにくい。
- ・戦争が終わって、先人が、がんばって今日の北九州市を構築した。本当に苦しい中で、製造業の企業のがんばりで、働くところがたくさんあったということを示してほしい。また、子どもたちに、物づくりに対して興味がわくように工夫してほしい。
- ・資料館は事実を紹介する場であるが、その後、我々がどういう形で平和を守るか。「未来」・「現在」をどう考えて、どう繋げていくか。これからどうするかについては非常に工夫をしないといけない。今後の運営でも非常に気を付けなければいけないし、これを基にしながら、「未来」に対しての働き掛けが重要である。
- ・「平和」ということを通しながら、「地球がシビックプライドを持って、未来に向かって」という子どもたちにとってのメッセージを込められたらいい。
- ・「プロローグ」から「エピローグ」までどう繋ぐか。ストーリーの中で、この地にどういう意味があるかを認識できるような形が必要。また、何を主張しているかを分かるような形。展示を見た後に立ちどまって考えていく時間が、非常に重要になる。
- ・「エピローグ」展示では、最後に感想を書くところがあるが、それ以上に、展示を見た後に、一人ひとりのものとする沈黙考というような、ゆとりみたいなものも必要ではないか。

(非核平和都市宣言)

- ・非核平和都市宣言の紹介は、展示コーナーの中で、過去の戦争を経て、市として平和のメッセージがあるというストーリーが来館者には分かりやすいのではないか。
- ・入口の付近に展示することは、ロビーの中などで入館者の目に触れる機会は多くなるが、入館者の動線を考えると思いのほか足を止めにくいのではないか。
- ・宣言や平和に対して取り組んできたことは、動線としては最初ではなくて、最後の方で展示する方がいいのでは。また、宣言は読み仮名を打つことも必要では。
- ・宣言を広く周知したいのであれば、設置場所を決めておく必要があるのかという気もする。状況に応じて、設置場所を移動することも可能ではないか。

- ・ここだったら見るだろうと思って置いて、実際に置いてみると見てもらえなかったというのは経験上多い。初めから決めずに、施設ができてから設置でも良いのでは。
- ・動線ではなかなか目に留まらないなら、パンフレットの形で渡せるほうが親切ではないか。外国語も含めた形で、印刷物として用意する方法もある。
- ・宣言の内容は、展示の中から、それぞれに感じ取ることがいちばん重要ではないか。目に留まるのか留まらないとか、どこに展示するのかということは重要なことではなく、展示室を最後まで歩いて「こういうことなんだ」と思うことがいちばん大切なことでは。

■議題 資料館の管理・運営：「戦時資料の収集」

(学芸員)

- ・学芸員を配置するなら複数配置した方がいい。
- ・学芸員の役割というのはかなり重要。市の職員として仮に採用するとしたら、長い年月の間、1人か2人で担当することになる。

(資料の収集)

- ・寄贈者の気持ちはあるが、資料の寄贈は全て受け取ることはできない。収蔵庫にも限りがある。仮に受け取ったとしてもコンセプトに基づかないものは展示できないことを伝える必要がある。
- ・寄贈を受けて展示するまでの一定のルールは必要。原爆資料館では、毎年夏、その年の6月までに寄贈された資料を収蔵品展として企画・展示している。
- ・資料を収集する際は、その資料にまつわるエピソードや寄贈者の戦争体験、家族である場合は聞いていた話などを詳しく聞き取っておくことが重要。寄贈いただく際に、学芸員が詳しく聞き取りをしている。
- ・平和をテーマにした記念館等とネットワークを結んで、資料収集のルール作りを行っていくことも必要である。
- ・いただけるものは全ていただくというスタンスでやっている。しかし、いただいた物を活用できない、表に出せないというのはダメだと思っている。
- ・引き受ける時に「光を当ててあげられる場があるかどうか」を第一に考える。難しいものでも、企画やテーマを作って展示することもあるので、「活用できるかできないか」がいちばん大きな判断基準になる。

- ・学芸員が必要だと思うし、寄贈を受ける取捨選択も必要だと思う。何でも持って来たらいいというものではない。後世のために使うとか発信する場で、その財産が日の目を見たり、入れ替えができるというのがないと意味がないのでは。
- ・古いものをどう残すか、減ることはない。重要なのは劣化を防ぐことである。アーカイブ化、映像に撮る等、3次元データとして保存する。新しい物づくりの、この市における保存の仕方、データの残し方も必要になる。
- ・語り部をAIで造って、語り部が立体映像で話しをする等、北九州は物づくり、ロボットなど、いろいろな技術があるので、何か後世に伝えるような方法、情報を集める方法も、試験的にやってみてはどうか。
- ・「資料いっぱい持っています。」だけど「100年経ってもそのまま大事にしています。」では困る。表に出さないで、大切に保管しているところもある。いい資料は、ある時期、必ず出して、みんなに見せていただきたい。

(戦争体験の収集)

- ・戦争体験の収集は、今後、戦後復興時の体験を集めることがメインになる。5年後、10年後に集めようとしても遅い。今からやるべきだ。戦争を実際に経験し、戦時下の記憶がある人はほとんどいないが、体験を集めることは必要だ。
- ・戦争を体験された方が非常に少なくなるという中、時間との闘いみたいなところがある部分は、早急にやり始めないといけない。生の声みたいな形の物を集めておく必要がある。
- ・戦後75年経ったので、女子挺身隊や学徒動員、八幡の大空襲を経験した人も恐らく90歳を過ぎている。その人から話を聞いて残すことは非常に難しいので、長崎は体験を聞いて引き継ぐことを行っている。資料館をつくった若い人が体験を引き継いで聞いていくというのが大事である。
- ・市民の戦争体験談を、映像アーカイブで語っていただくような、音声と映像で後々まで見ることができたら良い。

■その他

- ・ある被爆者の意見があって、広島市の資料館の「観覧料」というのに非常に違和感を覚えるという内容であった。自分たちは見世物になっているのではという意見であった。「観覧料」という表現は引っ掛かるので、検討していただきたい。

第4回 懇話会における委員の主な意見等

■議題：事業計画の策定について

(入館料・開館日・開館時間)

- ・近隣施設とのバランスはあるが、戦争をテーマにした施設なので、若者からすると高いお金を払って見ようというのは難しい。入館しやすい100円や200円ぐらいの設定が良いのでは。
- ・入館無料は良くない。無料だと展示を見る人は、値打も“タダ”だと思われる。やはり、一定の料金を示して、その中で、団体割引等を行うのが正しい。
- ・運営を考えると市外から多くの人が来るような仕組みを考える必要がある。近隣にある「松本清張記念館」や「文学館」との共通チケットを作るということも意識すべき、市内にできるだけ滞在してもらえそうな仕組みを考えてほしい。
- ・開館日や開館時間も、近隣施設とタイアップするなら、揃えることが必要である。
- ・イベントの時は無料にする、無料開放日を設ける等、目的に応じて無料を設定することも一つの考えである。

(正式名称：平和祈念館・平和記念館)

- ・「きねん」は長崎の原爆式典では「祈念」を使っている。広島では「記念」を使っている。それぞれに意味があるが、あまり変わりがないというのが率直な感じだ。
- ・「祈念」の「祈」の文字には美しさがあり、惹かれる。平和を普遍的に祈っていくべきものと感じられる。
- ・「祈念」は将来的に祈っていくことを表すが、「記念」は思い出に残すことなので、施設の趣旨からすると「祈念」が良いのでは。

(正式名称：平和都市歴史館)

- ・「平和都市歴史館」は意味が広いが、都市を起点に、平和を訴えていくことは良い。「平和都市記念館」というように文字を組み合わせてもいいのではないか。
- ・「都市」の響きは現代的で良く、「都市」は成長を感じさせる。「東アジア文化都市」や「SDGsみらい都市」等、最近では「都市」という言葉を使っている。
- ・「歴史」は、人によって歴史観が異なるので、使用しない方が良いと感じる。

(正式名称：平和伝承館)

- ・幅広い世代に伝えるという意味なら「伝承」がいい。
- ・「伝承」は施設のコンセプトを表していると思うが、最近では、震災関係の施設に使われていると感じている。

(正式名称：「平和都市ミュージアム」・「平和のまちミュージアム」)

※提案のみ委員意見無し

- ・ 博物館、美術館、記念館を表す言葉で「ミュージアム」がある。市内には行政以外にも、TOTOミュージアム、ゼンリンミュージアムがある。行政では、漫画ミュージアムがあり、「ミュージアム」という言葉は市民に近く、分かりやすい。
- ・ 漢字とカタカナを組み合わせると名称は長くなるが、それぞれ独立した意味を持つ。例えば、「平和都市ミュージアム」で多くのことが含まれる。
- ・ 未来に対して、学んでいく方向性も必要である。子どもたちに分かるように「都市」を「まち」に変えて、「平和のまちミュージアム」ではどうか。

第5回 懇話会における委員の主な意見等

■報告：「平和のまちミュージアム」開館に向けた取り組みについて

「北九州市平和のまちミュージアム条例」の概要について

(加害・被害の展示について)

- ・「加害・被害」という視点ではなく、当時、北九州に起きたことを学び、平和が大切だと考える施設にしてほしい。
- ・「加害・被害」の展示については、日本の一つのまちで戦争を始める権限はないので、一つのまちの歴史の中では、実際は関係ないが、歴史の流れとして日本とアメリカの国益の衝突で武力解決を選ばれてしまったという簡単な流れは示しておくべきだと思う。

(条例概要について)

- ・名称の「平和のまちミュージアム」は、一番妥当でいい名前だと思う。料金等は市の都合で考えればいいことで、運営もいろいろ考えすぎないで、将来的に一番無理のない形、続けやすい形で決めればよいと思う。
- ・入館料に関しては安価に設定しているのが非常にいいと思う。小中学生については減免措置をとるということで、平和教育ということ、子どもたちにまず見てもらうことに力を入れていることは非常にいいと思う。長崎原爆資料館でも、様々な減免規程を設けているが、その土地や状況に応じていろんなパターンで減免規程を設定していくことになると思う。
- ・休館日に関しては、長崎原爆資料館は年末の12月29日から31日を除いて、1月1日から開館しており、ほぼ年中無休の施設になるが、エリアで周遊してもらうことからすると、休館日を近隣施設と合わせることもいいと思う。
- ・イベント開催に応じて、柔軟な対応を考えているところがいいと思う。
- ・常設展示の一部を入れ変えていくことになると思うが、近隣の方や市内の方に関しては一度見てしまうと、なかなか足を運ぶ機会が少なくなる。イベントや企画を盛り込みながら、近隣の人にも思い出してもらうのは非常に必要なことである。
- ・平和のイメージと夜の静かさというのはとてもリンクしていて、静かでキラキラした太陽の下というより、内省的な時間を持つような場になればいいと思っている。18時以降に、夜のイベント作りも将来的に考えることができればいいと思う。

- ・新しいミュージアムを作る中で、非常に重要なことは市がいかにこのミュージアムを支えてくれるかという部分。応援団的な形でのあり方をどうPRするかということで、会員、年会費のような、いつ行ってもいい、身近に感じられるような仕組みが必要ではないか。ミュージアムにもそういう気軽にいける、何度も行けてそこで学んだり、ほかの人とコミュニケーションできたり、そういった場所にするために、市が考える、いわゆるシビックプライドの1つの材料になるような運営をお願いしたい。

■議題：懇話会における委員意見の整理及び今後の方向性について

(360度シアターについて)

- ・閉ざされた暗い部屋の中で、音の大きさ等で、パニックなる子どももいるかもしれない。この点を踏まえて展示制作を進めてほしい。また、パニックになった子どもへの対応等もミュージアムとして考えておく必要がある。
- ・お化け屋敷のように怖い体験をさせることが目的ではないので、あそこは怖かった、もう行きたくないと思われても困る。大変だったということを示すことは大切だが、演出過剰な展示も考えものである。
- ・静かな環境できちんと歴史を見られるという所を目指すべきで、ドラマティックな演出で引っ張るといってもある程度必要だが、そちらに走りすぎるのは良くない。あくまで学ぶ場ということであって、イベントを見に来るわけではない。

(展示解説)

- ・ミュージアムが何を大事にするかということ、純粹に客観的な事実からはずれないということ。どのような表現であっても、説明を求められた時に、これはこういう事実に基づいているということが言えればよい。この施設はこういう考え方を持っていて、その根拠が事実から離れていなければ良いと思う。

(資料収集)

- ・好意で持ってきてもらったものを無下に断るのはなかなか難しいので、心情的に受けたいという気持ちはあるが、極端に言うとガラクタの山になる現実がある。どんなに大きな収蔵庫でもすぐにいっぱいになるので、集めるときに厳しく将来的にどういう意味で保存する価値があるか考えて、その場でお断りする勇気が必要な面もある。

- ・ミュージアムの命は資料なので、厳しく見て、受け入れたものはきちんと管理して、データベース化して有効利用できるよう、また、研究者に提供、一般の人も見られるようにしないとイケない。厳しい考え方で対応をすることも必要だと思う。
- ・自分にとっては宝物みたいに大事だとみんな思っている。資料収集のコンセプトをきちんとしておかないと、自分にとっては命みただけど、展示されず、しまい込んだままどうなったのだろうという場合が多いので、断る勇気も必要である。
- ・その方にとっては大事な資料であっても、その物が何を伝えるのかというところが大事になってくる。使っていた人が亡くなった後、家族がどうなったなど、エピソードで伝わるものがある。ものだけではなかなか伝わらないので、周辺の情報をしっかり聞き取って収集をしたら良いと思う。
- ・長崎原爆資料館では、単に戦争中のものというのはお預かりしていないという整理をしている。こういうものは収集していませんとお断りして、場合によっては隣に民俗資料館があるので、そちらを案内して、そちらで受けることもある。

(その他)

- ・長崎原爆資料館では、原体験が違う現代を担う若い世代にどうやって戦争の記憶を伝えていくのかということが課題である。このミュージアムは今から立ち上げるので、私たちが課題としているところを、一緒になって考えていければと思っている。
- ・新しい平和教育の姿を模索する状況の中で、意義ある施設になると思う。知らない戦争を知らない世代に伝えていくという平和教育のターニングポイントという時期にオープンする施設なので、新しい平和教育のあり方を示していくリーダーになれるような運営をしていただきたいと思っている。
- ・ミュージアムが存在することを市の財産として大切にしていきたいことを願っている。「なぜ、ここにこの施設があるのか」、その「なぜ」と言って眺める方もたくさんいると思う。その「なぜ」にしっかり答えていくことで、まちの中に溶け込んだミュージアムになっていくように、そうならないかなければいけないと思う。
- ・立派なミュージアムができるので、行政と一緒に協力して一人でも多くの人に見ていただけるように、運営面で協力していきたい。

(仮称) 平和資料館開設準備懇話会運営要綱

(目的)

第1条 市民に戦争の悲惨さを伝え、平和の大切さ、命の尊さを考えるきっかけとする(仮称)平和資料館(以下「資料館」という。)の開館に向けて運営体制や事業内容等について、専門的な見地から意見を聴く「(仮称)平和資料館開設準備懇話会」(以下「懇話会」という。)を開催する。

(意見聴取事項)

第2条 懇話会では次に掲げる事項について、懇話会構成員から意見を聴取する。

- (1) 資料館のコンセプトに基づく展示内容の整理
- (2) 資料館の事業内容
- (3) その他資料館の運営に関すること

(構成員)

第3条 構成員は次の各号に掲げるもののうちから、市長が委嘱する。

- (1) 学識経験者
- (2) 他都市の平和資料館関係者
- (3) 本市の産業政策に識見を有する者
- (4) その他懇話会の目的に沿うとして市長が適当と認めた者

2 構成員の任期は令和4年3月31日までとする。ただし、構成員が欠けた場合における補欠構成員の任期は、前任者の残任期間とする。

(座長及び副座長)

第4条 懇話会に座長並びに副座長を置く。

- 2 座長は構成員の互選により定め、副座長は構成員の中から座長が指名する。
- 3 座長は懇話会を代表し、会務を総理する。
- 4 副座長は座長を補佐し、座長に事故があるときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 懇話会は、座長が招集し、座長が議長を務める。

- 2 座長は、必要と認めるときは、構成員以外の者の出席を求め、その者から意見を求めることができる。

3 懇話会の会議は原則公開とする。ただし、次に掲げる場合は、会議の決定により公開しないことができる。

- (1) 法令等に特別の定めがある場合
- (2) 不開示情報（情報公開条例第7条）に該当する事項を審議する場合
- (3) 円滑な会議運営が損なわれるおそれがある場合
- (4) その他非公開とすることに相当する理由がある場合

4 懇話会は、会議内容が前項ただし書に該当する場合は、次のいずれかの方法により会議の非公開を決定することができる。（なお、初めて開催する会議の非公開の決定については、所管課において確認した当該懇話会の構成員の総意に基づき、懇話会を代表する者（懇話会を代表する者が決定されていない場合は、会議の開催権限のある者）が決定するものとする。この場合において、各構成員の意見が一致しないときは、初めて開催する会議において決定する。）

- (1) 会議における議決
- (2) 構成員全員による個別承認
- (3) あらかじめ指名された構成員等による承認
- (4) その他懇話会が定める方法

（守秘義務）

第6条 構成員は、知り得た秘密を外部に漏らしてはならない。任期終了後も同様とする。

（庶務）

第7条 懇話会の庶務は、総務局において処理する。

（委任）

第8条 この要綱に定めるもののほか、懇話会の運営に関して必要な事項は、座長が定める。

付 則

1 この要綱は、令和元年8月27日から施行する。

平和のまちミュージアムの開館に向けたスケジュール

【令和3年度】

2月10日～

PR・情報発信の開始

- ・ SNSによる情報発信(ホームページ等)
- ・ チラシ配布(学校・地域団体等) 等

3月21日

戦時資料展示コーナーの展示終了

【令和4年度】

4月(中旬)

内覧会の開催

4月19日(予定)

平和のまちミュージアム開館・開館式典

(開館後の自主事業(案))

- ・ 開館記念特別展
- ・ 平和学習カリキュラムの構築・見学ツアー
- ・ 近隣の歴史・文化施設周遊ツアー
- ・ 夏休み期間中の親子講座 等

「北九州市平和のまちミュージアム」の開館について

1 開館に至る背景

戦後75年以上が経過し、戦争を知らない世代がほとんどとなる中、全国的に戦争の記憶の風化が懸念されている。本市では、八幡大空襲を始め、戦争による様々な悲劇がもたらされた。また、小倉が、長崎原爆の第一目標であった。

今こそ、戦争を知らない世代に、このような本市で起きた戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えていくことが重要である。

そこで、北九州市では、戦争体験や戦時下の暮らしの様子、戦後の復興を果たすまでの“まち”の変遷などを伝える「北九州市平和のまちミュージアム」を設置する。

【施設コンセプト】

- 市民の戦争体験や当時の暮らしを物語る資料などを保存・継承していく施設
- 戦争の悲惨さや平和の大切さ、命の尊さについて考える機会を提供する施設

2 施設概要

- (1) 名称 北九州市平和のまちミュージアム
- (2) 住所 小倉北区内4番10号（勝山公園中央図書館北側駐車場内）
- (3) 構造等 鉄骨造（地上1階）約940㎡
- (4) 諸室構成 展示室（約340㎡）、収蔵庫（約125㎡）、多目的室（約70㎡）など
- (5) 観覧料

区分	料金区分		
	一般	中学生・高校生	小学生
個人	200円	100円	50円
団体（30名以上）	160円	80円	40円

3 施設配置図



4 展示レイアウト及び展示内容（主なもの）



■運命の昭和20年8月8日・9日

- ・映像や音響を活用した360度シアター。
- ・8月8日の八幡空襲、翌9日原爆を搭載した爆撃機が小倉上空を飛来した後、長崎に向かった出来事を追体験する。

■プロローグ（導入展示）

- ・小倉陸軍造兵廠の位置や規模を表す大型グラフィック。
- ・原子爆弾と小倉の関わりを知り、来館者がミュージアムの意義を認識する。
- ・展示鑑賞への期待感を高める。

■戦前の北九州

- ・五市の特色や活気のあった暮らし等をグラフィックで展示。
- ・小倉陸軍造兵廠を再現するプロジェクションマッピング。
- ・戦前の北九州の繁栄と小倉と軍の関わりを知る。



■戦争と市民の暮らし

- ・当時の暮らし振りが分かる再現展示。
- ・銃後を守った市民の暮らし、子どもたちの生活等が分かる実物資料の展示。
- ・日々の暮らしが戦争と隣り合わせにあったことを実感する。



■戦後の復興

- ・旧5市が復興の歩みを進める姿を伝える映像モニター。
- ・再び発展し、北九州市が誕生する“まち”の移り変わりを知る。

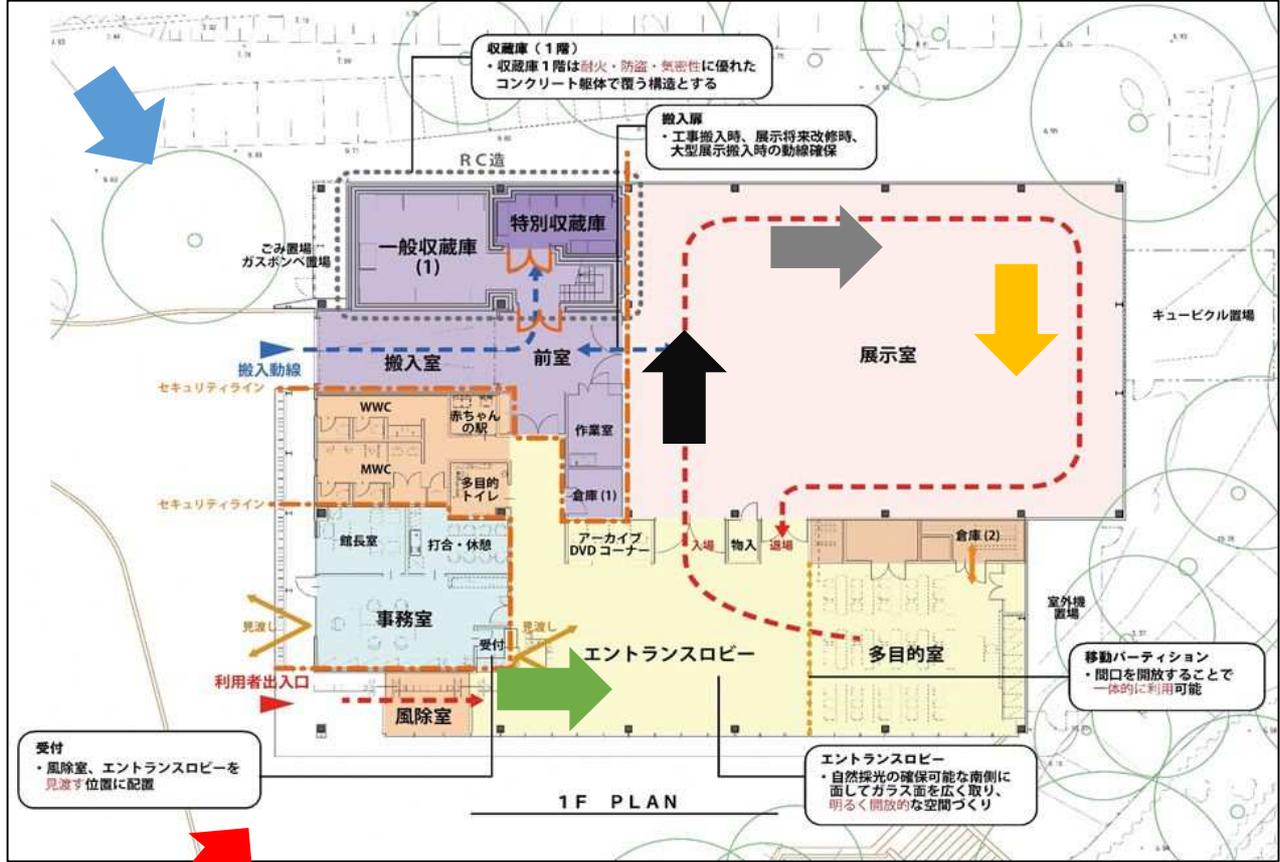
■その他

- ・小倉陸軍造兵廠で製造されていた風船爆弾等の模型展示
- ・北九州の“いま”・“これから”を紹介するモニター 等



建設工事の進捗状況（令和4年1月）

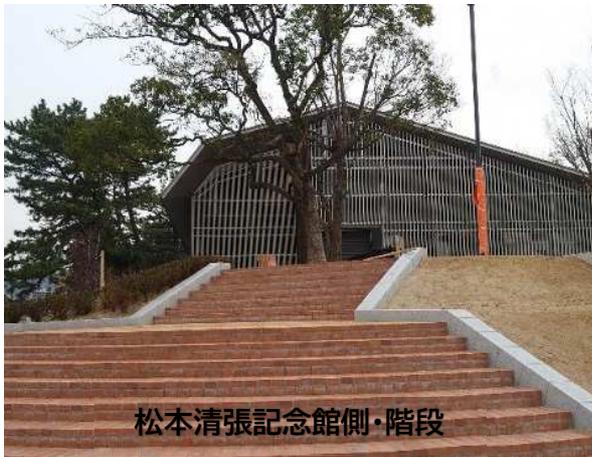
■全体図



■松本清張記念館前から



■子ども図書館側前から



松本清張記念館側・階段



外観・側面

■子ども図書館側から
(エントランス・多目的室)



エントランス・多目的室

■展示室①
(奥に小倉陸軍造兵廠映像展示)



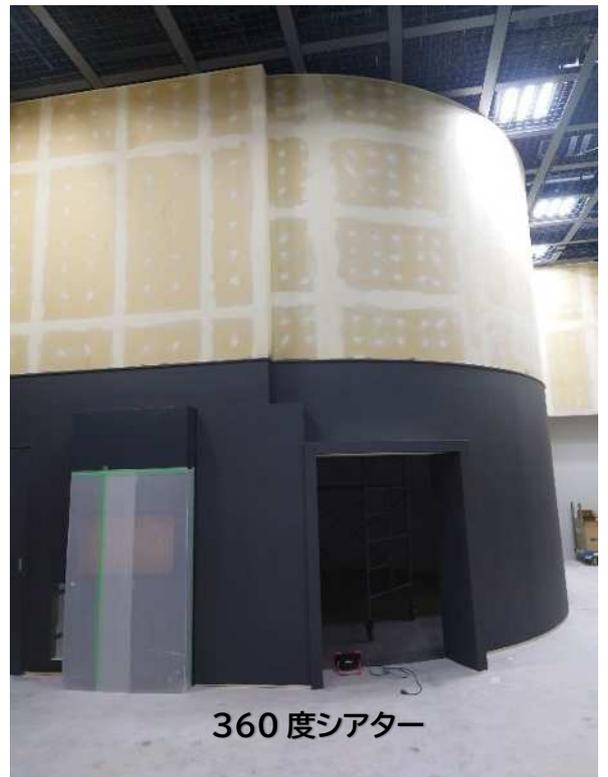
展示室①

■展示室②
(右側に生活再現展示)



展示室②

■展示室③
(運命の昭和20年8月8日コーナー)



360度シアター